



## 2月23日：国際チェチェンデー

### はじめに

1944年2月23日、スターリンはチェチェンとイングーシに住む人びと全体に中央アジアへの強制移住を命じた。移住の途中もしくはソ連軍の虐殺によって亡くなった人びとの数は50万を超える。移送を生き延びた人びとは、シベリア、中央アジアの過酷な冬がもたらす飢餓と病気に直面せねばならなかった。

数日のあいだにひとつの民族全体が、先祖代々受け継いできた土地からひとり残らず消し去られた。たった一晩で、チェチェンとイングーシから土着の人びとが一掃されたのだ。公式の地図、記録、百科事典のいずれからでも、チェチェンに関する言及は完全に切り除かれてきたが、強制移住から60年を経た2004年、欧州議会はこの出来事を組織的大量虐殺（ジェノサイド）と認める決議をようやく採択した。

2月23日の出来事を知る人は世界的にも少ない。しかしこの日を記憶から消し去ることはできない。国際チェチェンデーの制定は、以下の項目を実現することを目的とする：

- チェチェン人の大量虐殺とそれに伴う苦痛を、人間の犯した歴史的な大惨事と認めること
- スターリンによって強制移住させられた人びとすべてに敬意を払うこと
- チェチェン人の大量虐殺への自覚と理解を深め、この出来事を私たちみなに関わる歴史的な事件ととらえること
- チェチェン人が大量虐殺で被ったのと同様の人種差別、迫害といった罪が、ヨーロッパはじめ世界全体で二度と繰り返されないようにすること
- 現在進行している同様の残虐行為について考えること
- 次の世代の人びとにこの事実について教え、チェチェン人の大量虐殺から時を超えた教訓を学ぶことができると教えること
- 人種差別、迫害、大量虐殺に対して反対し続けること
- 正義、安全、尊厳、世界平和の理想をともに追求する人びとを支援すること

国際チェチェンデー、あるいは支援の具体的な方法については以下のサイトを参照：

[www.worldchechnyaday.org](http://www.worldchechnyaday.org)



## 歴史

1944年2月23日、チェチェン人とイングーシ人の中央アジア、ステップ地帯への強制移住がソ連によって突如開始された。厳冬のさなか、移送された人びとは突然の処刑と深刻な食糧不足を経験した。実際彼らの受けた被害は、当時ユダヤ人がヨーロッパの他の地域で受けたのと同じくらい徹底的で残酷なものだった。少なくとも移送された人びとの半数が命を落としたといわれているが、実際の数はそれよりもはるかに多かっただろう。

1944年1月初め、山に囲まれたこの小さな国にソ連内務人民委員部の何百という軍隊が到着しはじめ、地域のほとんどすべての集落を支配下においた。赤軍の日である2月23日、国中の町や村の人びとがソ連軍の建物で行われる会合へ招集された。その後まもなく訪れる大惨事を誰が予測できただろう。皆すすんで会合へ足を運んだ。ところがそれは祝典ではなかった。ソ連最高会議決定が読み上げられ、反逆とドイツ軍への協力を理由に、チェチェンとイングーシの人びとは皆強制的に移住されるという措置が発表されたのだ。

チェチェン人とナチスが協力したことを示す証拠は何も存在しなかった。にもかかわらず、スターリンはこのことを口実として、モスクワの意向に従うことを拒否し続ける民族全体を処分しようとした。実際、ドイツ軍がチェチェンの土地に入ったことは一度もなく、国境の一手手前まで来たにすぎなかった。それどころか、第2次世界大戦の主要な戦闘でチェチェン人兵士が立てた功績は彼らに数々の勲章をもたらし、その数の多さたるやソ連軍におけるチェチェン人兵士の実際の割合を凌ぐほどだったのだ。しかし最終的には兵士たちも送還を免れえず、部隊から引き離されて中央アジアの強制収容所へ送られることになる。

町にはスチュードベーカーのトラック（アメリカが連合国に貸与した）が到着し、銃をつきつけられたチェチェンの男女と子どもたちがそのなかに乗り込んでいった。トラックは近くの鉄道の駅まで荷物を運び、人びとは食糧をもたず粗末な衣服を身に着けたまま、覆いのない家畜用トラックのなかに押し込まれた。遠く離れた山々の集落に住む村人たちは平原まで歩くよう強制された。抵抗した者、歩みの遅い者は銃で撃たれた。妊娠中の女性、高齢者、移送が困難と思われる者は殺された。ハイバフの山村で700もの女性、子ども、高齢者が生きてまま焼かれたという記録もある。こうした虐殺はチェチェン各地で行われ、アウル（山村）の火はその後何週間もくすぶっていたという。

たった数日間でひとつの民族全体が、恐ろしいほどの効率で故国から根こそぎ消し去られ、チェチェンとイングーシは一夜にして無人の地と化した。地図の製作者



は公式の地図、記録、百科事典から、チェチェンとイングーシに関する言及を完全に取り除くよう指示された。

2月29日、内務人民委員部のラヴレンチー・ベリヤはスターリンに宛てて次のように書いている。

「チェチェンとイングーシで行われた移住措置の結果を報告します。2月23日、高山の集落を除く大多数の地区で移住措置が開始されました。91,250人のイングーシ人を含む478,479の人びとが立ち退きを命じられ、特別列車に乗り込みました。180の特別列車のうち159はすでに新たな居住地に到着しています。」

こうしてチェチェンとイングーシのおよそ50万の人びとは、ツンドラの凍土を渡る長く厳しい旅路をたどることになった。歴史的な大惨事の始まりである。密閉されたトラックに老若男女問わず詰め込まれた家族は、極寒のなかトイレや水洗設備のない状況を耐え忍んだ。家畜用トラックでは腸チフスが蔓延し、ブッヒェンヴァルトやアウシュヴィッツにも似た状況のもと多くの人々が命を落とした。食糧はほとんど支給されず、飢えと寒さは病人や身体の弱い者から命を奪った。途中で通過した土地では地元の人びとから軽蔑、罵りの言葉を浴びせられる。トラックのなかの人びとは敵と協力して罰せられたのだという噂が伝わっていたためである。

アブハジアの有名な教育者ディミトリ・グリヤはある駅で、この世のものとは思えない悲劇的な光景を目にする。

「それは信じがたい光景だった。異様に長い列車は、カフカスの山々の住民に見える人びとではち切れんばかりだった。女性、子どもたち、高齢者を含むこれらの人びとは東の土地に連れて行かれるのだ。彼らは皆悲嘆にくれ、打ちひしがれているようだった。チェチェンとイングーシの人びとは、みずからの意志で旅しているのではない。強制移住させられているのだ。おそらく彼らは「祖国に対する重大な罪」を犯したのだろう…」

死体はしばしば車両のなかから取り出され、線路の脇に放り出された。チェチェンの人びとは身近な人を守るため、また彼らに最後にイスラム式の埋葬を施したいとの思いから、必死になって遺体を偽装したり隠したりした。旅路は数週間続いた。その後離ればなれになった彼らは、現在のカザフスタン、ウズベキスタン、キルギスに相当する土地に定住するようになる。移送された人びとの数は何百万にも上るが、食糧や住居が提供されることはめったになく、その後は自活することを余儀なくされた。

20年後、モスクワ大学のある歴史家は次のように述べている。



「最初の2、3年のあいだ、チェチェンとイングーシの人びとはもっとも恐ろしく抵抗不可能な打撃を被った。飢餓ときわめて危険な疫病のために、何万という仲間の部族を中央アジアのステップ地帯に埋葬しなければならなかったのだ。」

その後肺炎と飢餓のためにこの世を去った人びとは何千にもおよぶ。この出来事はチェチェンの波乱に富んだ歴史的一幕にすぎない。19世紀半ば、チェチェンはロシア帝国の軍隊に抵抗して長期間の戦争を行ったが、その結果として行われた大規模な移住によって多くの家族が離散し、多数の人びとが生き別れた。

移送された人びとが暮らしたのは実際大規模な流刑地だった。定められたルールから少しでも外れた行動をとれば、投獄されるか強制労働が課せられる。しかしロシアの反体制派の作家アレクサンドル・ソルジェニーツィンは『収容所群島』で、チェチェン人が不屈の意志をもって生き延びたことを次のように描写している。

「けっして屈服することなく、服従という心理的習性に抵抗したひとつの民族がいる。その反抗はたんに個人的なものだけではない、民族全体がひとり残らず抵抗したのだ。その民族とはチェチェン人である……あらゆる特別な流刑者のなかで、ただチェチェン人のみが不撓不屈の精神を示した。不正な措置によって故郷を追われた彼らは、その日から何も信じることができなくなった……チェチェン人が監督者を喜ばせたり、彼らに取り入ろうとしたことは一度もない。それどころかチェチェン人はつねに誇らしげな態度をとり、敵意をあからさまに示していた。ここに驚くべき点がある。皆チェチェン人を恐れていたのだ。チェチェン人は誰の邪魔も受けることなく思い通りに生きることができた。30年間支配し続けた体制 [ソ連] でさえも彼らに法を守らせることはできなかった。」

チェチェン人を取りまく厳しい状況は1953年のスターリンの死のあとまで続いた。チェチェン人はスターリンの死後まもなく、モスクワに対して故郷への帰還を求める公式の陳情を行った。数はわずかではあったが、一部の人びとはすでに故郷に戻りはじめていた。1956年の第20回党大会でソ連の指導者ニキータ・フルシチョフは、チェチェン人など移送された人びとに対してソ連が非道な過ちを行ったことを公式に認めている。ソ連はあらゆる手を使って帰還を妨げようとしたが、このときまでにすでに多くの人びと故郷へ帰っていた。なかには先代の墓に埋葬するため、近親者の骨を持って故郷へ向かう人もいた。

それでも1944年以前の生活を取り戻すことはできなかった。記憶、貧困、病気、これらの苦しみがもたらす辛い思いのなかに、強制移住は消えることのない禍根を残した。帰還した人びとは、自分の家がソ連およびダゲスタンの植民者に売られて



しまったことを知り、彼らから家を買戻す必要に迫られたが、それはほとんどの場合不可能だった。

強制移住はチェチェン人にとって、個々人にとっての災難であるばかりでなく、民族全体にとっての集団的惨事である。かつてアウルとよばれた山地は荒廃し、住むことができなくなったため、チェチェン人の多くは民族の歴史のなかで初めて平原に暮らすようになった。こうして、山地特有の生活様式を根本から変えることを余儀なくされた。さらに、高齢の人びとが次々と命を落としたことで、何世紀にもわたって受け継がれてきた豊かな口承伝統に影響がおよび、チェチェンの文化にとって重大な損失が生じた。

大量虐殺によってもたらされた心理的なショックと混乱、その後チェチェンが被った苦難はけっして無視することができない。この恐るべき時代の記憶と悲しみは、今もなおチェチェンの人びとの心に深く刻まれている。

国際チェチェンデー

[www.worldchechnyaday.org](http://www.worldchechnyaday.org)

(訳・平野貴俊)